

## 編集後記

新たな年の「日本文学紀要」には、九篇の論考を載せることができた。決して多い数ではないけれども、各時代・分野にわたり、力の籠ったものばかりである。

文芸雑誌の新年号といえ、編輯に意を尽くした、その年の最も充実した号であるのが常だが、この「日本文学紀要」が、なぜ長い間「学苑」の年頭に据えられてきたのか、またそれに価するだけの内容を備えているのか、わたしたちは年の革まるたびに考えてゆかなければならないと思う。

授業を典型とする「教育」が、与え、放出するエネルギーであるのに対し、「深沈にして静かなる者」(福澤諭吉「学問之独立」)である「研究」は、研鑽の蓄積であらう。とりわけ「言葉」を考える文学・語学においては、「深沈」であることが尊い。読者が、論考のそれぞれに就き、著者とともに、自己を見つめ、対象と向き合った「静かなる」時間を共有していただければ幸いである。

そして最後に、研究の成果をこうして公にできたのは、わたしたちの力のみでなかったことも、また銘記しておきたい。万般に及ぶ細心の注意と配慮とをもって、原稿を確かな文字に定着してくださった「学苑」編集室の皆様から御礼申し上げる。

(吉田)

## 編集委員

吉田 昌志  
茅場 康雄  
久下 裕利

## 学苑 七百九十五号

定価 八四〇円(本体八〇〇円)

購読料 一カ年分 一〇〇八〇円

(本体 九六〇〇円)

平成十八年十二月二十日 印刷

平成十九年 一月一日 発行

編集発行人 竹 田 喜美子

印刷所 三 秀 舎

発行所 昭和女子大学

近代文化研究所

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂一ノ七

電話 03(3411)5300

☆掲載論文の無断転載を禁じます。